

を警戒せしめ、熊は先づ屋内に侵入したので、輔吉は手槍を執つて遊へ戦うたけれども、策平等途に之を倒し、赤縣廳に赴いて自首した。翌廿四日芝木喜内と藤江松三郎は、近江長濱驛に至つて多賀賢三郎を發見し、兩側よりその駕籠を挟撃し、彦根縣に自首して十二月七日金澤縣の吏に引渡された。唯石黒圭三郎を探索する爲東京に赴いた島田伴十郎と上田一二三とは、圭三郎が東海道を西行した後に會して之を得る能はず。幾くもなく本多彌一などが目的を達したとの報を得たから、東京飯田町なる金澤出張所に自首した。

(四)同志の服刑—明治五年十一月四日石川縣刑獄寮は本多彌一以下の罪を處斷したが、清水金三郎は當に菅野輔吉の門前を警戒したに止り、未だ刀を抜かなかつたから禁錮十年に處せられ、島田伴十郎と上田一二三とも亦未遂罪たるを以て禁錮三年とし、他の十二人は皆自裁を命ぜられたが、子孫世襲の祿を享くるを許され、その遺骸は本多氏之を収めて、大乘寺なる故主本多政均の墓側に瘞め、碑を樹て、姓名と絶命の詞とを録した。蓋しこの舉は明治年間に於ける復讐史の最後を飾るもので、太政官が六年二月七日布達第三十七號により復讐を嚴禁したのも、亦これがあつた爲であるといはれる。

ホンダサダキチ 本多貞吉 貞橘と書くこともある。肥前島原の人。京に出て製陶を青木木米に習ひ、文化中金澤春日山窯に從業し、同八年能美郡若杉窯の起つた時之に赴き、文政二年閏四月五十四歳を以て歿した。

ホンダトシアキ 本多利明 通稱三郎右衛門。北夷又は魯鈍齋と號した。父伊兵衛は加

賀の産であつたが、人を害して越後に走り、延享元年利明をその地に擧げたともいふ。利明十八歳の時江戸に出で、關流の算學を今井兼延に、天文學を手葉歲胤に、劍法を山縣大貳に學び、明和四年終に私塾を牛込吾羽町に開いた。文化六年前田齊廣之に二十人扶持を興へ、利明はこの秋を以て金澤に來て、齊廣の爲に歐洲の形勢を説き、軍艦の必要ある所以を述べ、藩内に初めて八線使用法を傳へ、半歳を経て再び江戸に歸り、本郷邸の傍に住した。その忌辰は河北郡傳燈寺の碑に文政四年三月十六日享年七十八とし、晉羽桂林寺の過去帳には文政三年十二月廿二日享年七十七とする。後大正三年二月十一日正五位を追贈せられた。利明の手書往々本多を本田とし、利明を理明に作るものがある。蓋し前田侯の利字と老臣本多氏の姓とを避けたものかも知れぬ。その諡號を曉寮院理山元明居士といふも、亦理明の諱に因るものである。利明に男子なく、一女てつがあつたが後裔斷絶した。

ホンダトシアキケンセイギョウジヨウキ 本多利明先生行狀記 一冊、宇野保定述。保定は利明の門人で、河北郡傳燈寺にある利明の記念碑建設者の一人である。

ホンダトシアキノヒ 本多利明の碑 河北郡傳燈寺境内に在る。表面に本多利明先生之碑と刻し、左右及び背面に碑文が在る。文政四年孟秋門人宇野保定・萩原秀庸・近藤幸兌の建てる所で、關貢秀その文を撰じ、利明の尺牘を集めて埋瘞したといふ。

ホンダヒヨウゴ 本多兵庫 本多政重の臣寺田庄左衛門の子左京は少年の時から近習として召仕はれ、殊の外出頭して本多兵庫と稱

するに至つたが、正保四年政重の卒した際秘藏の古筆を隠匿したこと翌年前田利常の知る所となり、河北郡宮坂の松原で殺害を命ぜられた。この事は三壺記に見える。

ホンダマサカズ 本多政和 加賀藩の老臣本多氏の第九代。政禮の嫡子。文化十年八月廿六日出生。母は長連愛の女。初名馨松・左馬助。文政三年九月六日政禮の遺知五萬石を受け、文政十一年十二月廿七日從五位下播磨守に叙任し、弘化四年九月五日享年三十五を以て卒した。法號義誠院、野田山に葬る。

ホンダマササネ 本多政以 加賀藩の老臣本多氏十一代政均の嫡男。元治元年七月廿一日出生。幼名資松。明治二年七月父政均の凶及に殞れるや、家督を繼ぎ五萬石を襲領し、十三年五月華族に列し男爵を授けられ、三十七年七月貴族院議員となり、爾後改選毎に之に當つたが、大正九年病を以て辭し、十年六月三十日正四位に陞叙、七月十六日卒去した。享年五十八。法號大觀院、野田山に葬る。

ホンダマサシゲ 本多正重 本多佐渡守正信の弟。天正十二年末森の役に、前田利家の軍に從うて出陣した。正重は諸國に流浪して、當時加賀に居たのである。藩翰譜にいふ。正重は初め三彌といひ、後に三左衛門になつたが、世人は言ひよいまゝに尙三彌と呼んだ。その末森陣に從うた時には前田利家の足輕大將であつたとある。富田景周いふ。この兄彌八郎正信は、天正八年から末森・山中兩堡に居り、十年徳川家康の召によつて加賀を去つたが、三彌は八年から十二年まで五年間加賀に居たのであると。

ホンダマサシゲ 本多政重 加賀藩の老臣

本多氏の家祖。徳川氏の臣佐渡守正信の二子で、天正八年を以て生まれた。政重年十二の時倉橋長右衛門の養ふ所となつて長五郎といひ、二年の後家康に仕へたが、慶長二年秀忠の乳母子岡部莊八を斬り、伊勢に遁れて正木左兵衛といひ、幾くもなく京師に赴き大谷吉隆に仕へ、四年更に宇喜多秀家の臣となつて祿二萬石を受け、五年西軍に從うて伏見及び關原に戦ひ、敗後近江堅田に隱棲した。次いで小早川秀秋に招かれたが從はず、安藝に赴いて福島正則から三萬石を受け、七年正則を辭して前田利長に仕へ、食祿尙舊の如くであつた。九年政重又去つて米澤に赴き、上杉景勝の臣直江兼綱の養子となり、姓名を直江勝吉といひ、通稱を大和又は安房といふたが、後米澤を脱して京都に住んだ。十六年慶堂高虎は再び政重を前田氏に推舉し、その交渉を重ねた後政重は七月又金澤に來て三萬石を受け、本多氏を稱した。十八年幕府の前田氏が現に有する新川郡の地を返還せしめんとすの意あるや、利長乃ち政重を江戸の兄正純と駿府の父正信とに遣はして藩處せしめ、因つて新川郡を失はざることを得た。十九年利長の薨後、六月十三日附を以て利常から二萬石を増したのには、之に對する報償であつた。後大坂兩次の役に從ひ、元和元年閏六月十九日從五位下安房守に叙任せられ、正保四年三月老を告げ、大夢と號し、六月三日享年六十八を以て卒。法號回仙院、野田山に葬る。その著に百戰百勝傳がある。

ホンダマサシゲテン 本多政重傳 一冊。加賀藩老臣本多政重の傳記で、二代政長の自記に係るものである。